

## 高市黒人歌の特質

——「棚無し小舟」と「赤のそほ舟」——

森

斌

はじめに

万葉集の叙景歌は、旅をする役人たちが自然をうたうところから出発している。その叙景歌の先駆者と称されているのが、万葉第二期の歌人である高市黒人である。持統・文武天皇時代の宮廷歌人の一人であるが、生没年や経歴もわからない。万葉集に収められている十九首、そのいずれもが行幸従駕のときか、役人として地方を旅したときに詠まれている。安礼の崎（一・五八）、四極山（三・二七二）などはその所在地に問題があるにせよ、旅は東海道・北陸路・摂津・吉野などである。その旅の中では行幸従駕に詠まれたと確認できるのは、持統太上天皇の大宝二年参河の

ときと文武元年から大宝二年までの吉野のときにうたわれた巻一・五八番と七〇番である。

黒人の歌は、巻一に四首（三三、三三、五八、七〇）、巻三に十三首（二七〇、二七七、二七六の一本、二七九、二八〇、二八三、三〇五）、巻九と巻十七にそれぞれ一首（二七一八、四〇一六）が載せられている。その十九首は、全てが短歌であり、長歌の詠作が見られない。作られた年代の知られる歌は、行幸従駕と認められる三河と吉野のときの歌で、五八番と七〇番から文武元年から大宝二年迄ということになる。その他は、この数年間に全作品が創作されたものでないにせよ、ほぼ活躍の時期として文武朝を中心に考えてよいのであろう。すなわち、万葉集の歌の配列

なども参考にしたとき、黒人は人麻呂などより少しく遅い時代に活躍した宮廷歌人であったのではないか、と思われる。とにかく第二期を代表する叙景歌人が高市の黒人である。

ちなみに自然をうたう叙景で舟を登場させているが、黒人を「舟の歌人」と称したい内容がありそうである。舟旅に詠作していることにも原因するのであるが、舟を登場させる歌が多いこと、また「棚無し小舟」や「赤のそほ舟」などの特別な歌語を使用していることに注目するためで、この視点に基づいた黒人歌の特質を、この考察は対象としたい。

## 一、短歌歌人

黒人は雑歌ばかりを残したのであるが、何故か長歌が一首も万葉集に載せられていない。黒人と同時代の宮廷歌人には、柿本人麻呂や長意吉麻呂や春日老、そして置始東人がある。そこで長歌が載せられていないことを考えるために、同時代の宮廷歌人も参考にするが、まず黒人歌の特徴を確認したい。

黒人歌は、いずれもが羈旅での詠作であること、枕詞の使用が見られないこと、例外とすべき一首を除き地名が必

ず詠み込まれていること、心情語の使用が極めて少ないことなどを特徴としている。心情語が少ないことで叙景歌と見做されるのであるし、旅に素材するので旅愁が主題になるのであるが、これはかなり自由な立場から創作しているからであるまいか。もちろん自由や個性といっても宮廷歌人であることの制約もある筈であるが、歌に表われた特徴に、個性的な創作の場を認めたい。ただし、中西進博士は「日常的な褻の場」を代表する歌人として捉えている<sup>(1)</sup>。

さて、行幸従駕歌と認められるのは次の二首であった。

何処にか船舶てすらむ安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟（五八）

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びそ越ゆる（七〇）

持統太上天皇が参河に行幸したのが大宝二年で、吉野に御幸したのが文武元年から大宝二年までの期間であるから、この六年間が創作活動の中心となるのではと思われるが、それ以前に既に従駕歌の伝統ができていた。行幸で歌を献上することは、額田王にも見られるにせよ、やはり人麻呂が適当な完成者である。人麻呂の従駕歌は、その後類型的な作品を生む典型になるのであるが、しかしその場合には長歌に関してという限定が必要であろう。例えば吉野の行

幸従駕歌（一・三六―三九）は、行幸の地名・土地の形容と景に対する心情、そして讚美という展開で一首が構成される長歌の典型である。そして、この長歌の伝統は、笠金村や山部赤人などの吉野従駕歌でも確認できる。しかし、反歌として添えられた短歌については、どうであろうか。

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む（三七）

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せずかも（三九）

人麻呂の吉野讚歌は、二首の長歌が大宮人でにぎわう景と自然神の山と川の神も現人神たる天皇に奉仕する姿とをそれぞれ分けてうたう。反歌も長歌のそれぞれに内容が対応してうたわれている。「見れど飽かぬ」（三七）は第一長歌（三六）にもうたわれているし、「山川も依りて仕ふる」（三九）はやはり第二長歌（三八）に用いられた言葉である。赤人の吉野讚歌にうたわれた反歌は、反歌として無視できない部分のあることも自明であるにせよ、短歌として単に論評されるべき独立した内容があって、人麻呂のそれと異質なものである。

ちなみに赤人の代表的な吉野讚歌の反歌二首は次の如くである。

み吉野の象山の際の木末にはここだもさわく鳥の声かも（六・九二四）

ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く（六・九二五）

人麻呂が持統天皇から吉野讚歌を要請されて約三〇年後、赤人にも一世一代の榮譽をになう晴れの場が与えられた。

長歌の讚仰とは異質な孤独を主題にした反歌がうたわれた。詔に応じて作歌された長歌は、人麻呂の吉野讚歌を意識していても、反歌に伝統が見られない。むしろ反歌では、個人的な感情というべき孤独を主題にしている。聖武新帝の神亀二年の吉野行幸で献呈されたのであろうが、赤人の引用した反歌は作者の主体と関わるものであって、伝統や形式などというものがかなり自由であった、と考えてよい。もしも反歌に規範というべきものが認められず、自由に行幸従駕歌がうたわれ、そして献呈されているのであれば、たまたま反歌が短歌として万葉集に記録され、長歌が切り捨てられることもあり得る。黒人の行幸従駕歌二首（五八・七〇）は、讚美や讚仰と異なる孤独な世界が表白されているが、長歌の反歌であった可能性もある。黒人は短歌歌人であるが、献呈するような長歌を作らなかったのだろうか。

そこで文武元年から大宝二年迄の年代が確実な従駕歌を  
年表で示せば、次の如く整理できる。

文武元年（六九七）

文武二年（六九八）

文武三年（六九九）

太上天皇（持統）難波行幸 置始東人（一・六六）、

高安大島（六七）、身人部王（六八）

大行天皇（文武）難波行幸 忍坂部乙麻呂（一・七

一）、藤原宇合（七二）、長皇子（七三）、長意吉麻

呂（三・二三八）

文武四年（七〇〇）

大宝元年（七〇一）

大行天皇吉野行幸 長屋王（一・七五）

太上天皇紀伊行幸 坂門人足（一・五四）、調淡海

（五五）、春日藏首老（五六）、人麻呂歌集（二・一

四六）

太上・大行天皇紀伊行幸 作者不明（九・一六六

七・一六七九）

大宝二年（七〇二）

太上天皇參河行幸 長意吉麻呂（一・五七）、高市

黒人（五八）、誉謝女王（五九）、長皇子（六〇）、

#### 舍人娘（六一）

以上が年代の確認できる従駕歌であるが、それらは短歌  
のみで一首の長歌も含まれていない。さらに年代が決定で  
きる慶雲四年（七〇七）までの従駕歌を参考にしても、そ  
こからも長歌は発見できない。

長歌の創作という意味では、文武三年に置始東人が弓削  
皇子薨去の時に詠作しているし、文武四年に人麻呂が明日  
香皇女の殯宮で作歌している。つまり宮廷歌人として参加  
する晴れがましい場には、万葉集に収められている文武天  
皇時代の歌から判断して、行幸従駕が含まれなかったのだ  
がある。再び行幸が晴の場として、宮廷歌人がはなばなく  
活躍するのは元正・聖武天皇の時代まで待たなければなら  
なかった。長歌の創作とその献呈は、万葉第三期の歌人達  
に機会が与えられても、第二期の文武朝に縁がなかった。  
高市黒人は人麻呂と重なる時代の歌人であっても、文武朝  
に宮廷歌人としての主な創作がなされ、当然長歌の詠作に  
無縁だったのである。

黒人と同時代の宮廷歌人と称されるのは、長意吉麻呂や  
置始東人や、さらに春日老などがいた。長歌が万葉集に載  
せられている歌人は、東人だけであって、それも挽歌で  
あった。行幸従駕歌として、巻一・六六番歌が持統太上天

皇の難波に旅をされたときにうたわれている。春日老は、僧名を弁基といい大宝元年に還俗した。三野連が入唐のときに作歌した六二番を除く七首は、旅での創作である。老は旅に素材して作歌していること、短歌ばかりの詠作であることに黒人と共通するのであるが、長意吉麻呂は黒人と最も共通した性格を見せる宮廷歌人である。すなわち、意吉麻呂は十四首という作品の数、しかも全てが短歌でありながら歌に幅を認めなければならない。そして、即興で数種の物を歌に詠み込む才能と笑いを主題にした歌がある一方、

苦しくも降り来る雨か神が崎狭野の渡りに家もあらなくに（三・二六五）

という後世に影響を与えた歌も見られる。引用した歌は、黒人の旅愁にも通じていて、家郷を描かずに主題を表現している。巻十六に収められた戯笑歌八首を除いたとき、残る六首は旅での作品であり、しかも枕詞が用いられていない。

意吉麻呂歌で創作時期が知られるのは、文武三年から大宝二年までの四年間ということも、黒人と活躍時期が重なる。そして、意吉麻呂は短歌のみ残していること、枕詞の使用が確認できないこと、即興の歌を作っていること、歌

に諧謔性が認められることなどは、黒人の歌人としての性格に一致する。置始東人や春日老などよりも、やはり意吉麻呂が比較すべき代表的な歌人である。そこで大宝二年の持統太上天皇参河行幸に従った黒人（五八）と意吉麻呂（五七）の二首を採り上げる。

引馬野にほふ榛原入り乱れ衣にははせ旅のしるしに（五七）

何処にか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟（五八）

引用した二首は、巻一に収められている。行幸が十月から十一月迄であるから、藤原京に戻った上皇は、約一ヶ月後の十二月二六日に崩御された。上皇最晩年の行幸であるが、黒人も意吉麻呂もいつもの羈旅歌の如くに特徴が表われている。五七番は、即興的な遊びの精神である「笑い」ともいえる明るい従駕の雰囲気、榛を衣に染めよと呼びかけることで表現している。遠く辛い旅路にあつて、美しいもの楽しむべきものに接した喜びを、「入り乱れ衣にははせ」としたところに、即興的な遊びが表現されたのである。一方、黒人は叙景歌の内容にあり、旅愁という内省的な主題を景に描くことでうたっている。その主題を描くために、地名が第三句に用いられているとか、家郷を直接描

写しないという森朝男氏の指摘の如くであつて、黒人歌の特徴がよく表われている。同じ宮廷人として、同じ場で作歌されている二首を比較しても、全く対照する内容の従駕歌を見せていて、それは短歌の場合に規範性のなかったことを物語つていそうである。

黒人歌は、同時代の宮廷歌人の存在や従駕歌の性格から長歌の反歌としてうたわれたというより、はじめから自由な創作の立場で作られた、と考へてよい。黒人がうたう叙景歌とは、持統や文武の行幸に従つて献上する晴れがましき場のものではあつても、自由で個性的に創作されていたのである。その結果は、短歌しか誕生しないことになつてしまつたのである。引用した「何処にか」(五八)や「大和には」(七〇)の歌は、かかる時代の宮廷歌人である黒人が創作したものである。

## 二、棚無し小舟

黒人は、昼間見た舟を夜になつてから、今頃どうしているだろうと想像する歌を、二首も作っている。大宝二年の参河行幸でうたつた「何処にか」(五八)の歌と近江での歌である次の一首である。

率ひて漕ぎ行く船は高島の阿渡の水門に泊てにけむか

も(九・一七一八)

黒人は近江路の旅で七首の歌を残して、「楽浪」「近江」「比良」「高島」を地名としてうたつてゐる。地名では、楽浪を三首に、高島を二首に、その他が一首ずつに登場する。高島がうたわれている近江路での作とは、次の一首である。

何処にかわれは宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば(三・二七五)

高島とは琵琶湖の西岸で、ここまで来ればまさしく荒涼とした鄙地である。この湖北に位置する高島から上京するためにせよ、北陸へ旅するにせよ、都の人を苦しめ、そして不安にさせる場所であらう。特定の処が歌枕になるのであらうが、高島も万葉時代から歌枕の地になつてゐる。波高い湖北の鄙地である高島は、黒人歌二首にも行旅の不安を暗示している。「率ひて漕ぎ行く」舟人もまた黒人も、天離る異土で物思ひをしなければならない。京師を一步離れたらそうであらうが、遠い地であればある程、また荒涼とした場所であればなおのこと、旅行者には不安や恐れがつきまとう。日常とは異なり、出会いも別離もことさら印象深いもので、まさしく一瞬のことでありながら一期一会であつた筈である。

黒人歌の題材に、散った楓の葉、旧都、漕ぎ去る舟、飛び去る鶴、鳴いて行く呼子鳥などがうたわれていることから、中西博士は「きわめて特徴的であるのは、去つてゆくものが題材として多い」ことを指摘する。<sup>(3)</sup> 昼間の出会いを夜になって追想するのは、一人残されたという孤独な気持ちが強まるからであろう。孤独が去るもの、遠ざかるもの、離れるものの景に注目させるのである。その去る景としては、「舟」を用いることが一番多い。ちなみに、五首に舟を用いて、鳥（鶴と呼子鳥）の三首が二番目である。

船泊てすらむ、棚無し小舟（五八）

赤のそは舟（二七〇）

棚無し小舟（二七二）

わが舟は（二七四）

漕ぎ行く舟（一七一八）

直接に「舟」を用いていない歌でも、「磯の崎漕ぎたみ行けば」（二七三）や「武庫の泊ゆ出づる船人」（二八三）なども、舟の歌といってよい内容がある。黒人は「舟」に続く言葉として「泊つ」「出づ」「漕ぐ」などの動詞を用いているが、これらの表現に特別な意味を持たせていない。万葉集の「舟」の考察では、佐藤武義氏が詳細に論じられていて、それを参考にしても特徴的な動詞などというべき

言葉が見出せない。

しかし、「棚無し」「赤のそは」という舟を形容する言葉は、歌の素材として選ばれた特別な言葉である。すなわち、「棚無し小舟」や「赤のそは舟」などは、去るものであり、黒人の個性を感じさせる特別なもの、と思われる。そこでまず「棚無し小舟」を採り上げて考察を深めたい。

「棚無し小舟」は、万葉集中に三例見られるが、黒人が二首と笠金村が一首である。黒人歌は既に引用した五八番と巻三・二七二番であり、金村は巻六・九三〇番である。

四極山うち越え見れば笠縫の鳥漕ぎ隠る棚無し小舟（二七二）

海少女棚無し小舟漕ぎ出らし旅のやどりに梶の音聞ゆ（九三〇）

黒人の二七二番歌は、「……見れば……見ゆ」という国見歌の形式を踏まえて、そして叙景の中心に第五句の「棚無し小舟」がある。そもそも「棚無し小舟」とは、舟の棚もない小さなものとして解して来ている。海という巨大なものと対照をなすものが舟である。さらにその対照的な大と小との組合せとして、わざわざ小たる舟を「棚無し小舟」とすることで、点景に黒人の動揺する心情が印象深く込められることになっている。この点景で表現された孤愁

とは、「舟」「小舟」では表わせないのであって、「棚無し小舟」とすることで描写が可能になったのであろう。

さて、金村の九三〇番歌は、上句に「らし」を用いて、下句でその推量の根拠を示す伝統的な手法が特徴である。

漁師の少女が漕ぎ出したらしいとする舟を、わざわざ「棚無し小舟」とした点に金村の創意が感じられる。しかも「海少女らが焼く塩」(五)などが普通の用法であって、その点に上句の「海少女棚無し小舟漕ぎ出らし」が金村の自慢であったかも知れないが。ただし、旅愁としては、黒人歌の二首が鄙での宿りの不安を象徴的に「棚無し小舟」で描いていて生彩を放っている。そもそも、歌語として「棚無し小舟」を用いているのは、黒人歌二首が嚆矢になる。旅の不安を舟で表わそうとするのであれば、「小舟」を登場させ、さらに適当な形容を考えるのが一般的に思える。黒人はかかる創作に進まず、新しい歌語の創造を試みた。新しい熟語が誕生するのは、自由な創作の場に基づくのであるが、自己表現の発展を試みているためであろうか。その点を考察するため、「小舟」と「大舟」とを比較してみたい。

まず「大舟」の用例数を示せば、枕詞が二二首、普通名詞が二七首で用いられている。枕詞が多いことは、その掛

かり方として「思ひ頼む」「頼む」などが採り上げられて、「大舟」が頼りになる乗り物という固定したイメージに基づく。その他は、「たゆたふ」や「ゆくらゆくら」という数字を示している。それに対して普通名詞で用いられている例は、どうであろうか。特徴の第一としては、大舟を形容する言葉が全く無いことである。「舟」「小舟」でも、それを形容する表現として、どんな形のどのような舟かなどを必要とする場合もある。ところが、「大舟」は、いかなる形容辞も必要としない。そもそも長歌の六例を除く短歌の二二首の用例は、初句が十九首も「大舟」でうたわれている。また、初句「大舟」に続く第二句も類型となっていて、「真楫繁貫き」などの表現であるから、立派で大型の官船などになり、さらにそれは遣唐使船や遣新羅使船などに結びつけられることになる。ここで整理して示す如く類型的として処理できる「大舟」に対する「小舟」はどうであろうか。

まず「小舟」の「ヲ」であるが、一般的に「ヲ」と訓み問題になっていない。意味は小さい意になる接頭語で、親称と解して説明している歌もある。基本的に「小」の意で「ヲ」と訓む、というべきであろう。その「小舟」は「大舟」と異なり、かなり豊かな内容の形容辞を伴う。そこで



「小舟」をどう形容しているか、用例を整理して示せば次の如くである。

- (あ) 沖行くや赤ら小舟に裏遣らば (十六・三八六八)
- (い) 百づ島足柄小舟歩き多み (十四・三三六七)
- (う) 島伝ふ足速の小舟風守り (七・一四〇〇)
- (え) 湊入の葦別小舟障多み (十二・二九九八)
- (お) 海人小舟帆かも張れると (七・一一八二)
- 海小舟泊瀬の山に降る雪の (十・二三四七)
- 白波の 八重折るが上に 海人小舟 はららに浮きて (二〇・四三六〇)
- (か) 葦刈ると 海人の小舟は 入江漕ぐ 梶の音高し (十七・四〇〇六)
- (き) 武庫の浦を漕ぎ廻る小舟粟島を背向に見つつ羨しき小舟 (三・三五八)
- (く) さ丹塗の 小舟もかも 玉纏の 真櫂もかも (八・一五二〇)
- さ丹塗の 小舟を設け 玉纏の 小楫繁貫き (九・一七八〇)
- さ丹塗の 小舟もかも 玉纏の 小楫もかも (十三・三二九九)
- (け) 川瀬を渡るさ小舟のえ行きて (十・二〇九二)

(こ) 棚無し小舟 (五八、二七二、九三〇)

(さ) 奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ (十七・四〇一七)

(し) 真熊野の小舟に乗りて (六・一〇三三)

(す) 漁する 海人の少女は、小舟乗り つららに浮けり

(十五・三六二七)

大舟に小舟引き副へ潜くとも (十六・三八六九)

布勢の海に 小舟連並め 真櫂懸け い漕ぎ廻れば

(十九・四一八七)

以上の二一首をまとめれば、形容辞が赤い色を表わす「赤ら、さ丹塗」など四例、「海人(の)」が四例、そして「棚無し」が三例となる。その他が全て単独の用例ということになり、「小舟」だけで用いられ形容する言葉がない歌三首を加えて、二一首は「舟」で表現できない感情を表現しようとしたことになる。「舟」は万葉集中で百二十首程度に用いられた歌語であるが、「大舟」「小舟」で描写しようとした七十首程がさらにあった。四九首の「大舟」は類型的なものになっていったが、「小舟」は類型というより個別的な用例と認められる。頼りにならない不安な感情を表わすことこそ、それは個人的なものである。黒人は、積極的に己の感情を舟に託した。「小舟」ではまだ一人残

された旅中の孤独を表わせなかったのであろう。過ぎ去って行つた「小舟」を「棚無し」とすることで、大海の点景に込められた旅愁が黒人の個性に高められたのである。

黒人は、自己の動揺する心情を小さな舟に託した。そして、己の心情がいかに心細いものであるかを新しい歌語で表現した。すなわち、「棚無し小舟」とは黒人の孤独から誕生した歌語である。

### 三、「赤のそほ舟」

黒人は叙景歌人という評価が一般的である。それは、心情を景で表現したり、心情語の少ないことによる。しかし、次の一首は、心情語の「物恋しき」を用いながら、情と景の表現に新鮮な内容がある。

旅にして物恋しきに山下の赤のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ

#### (三・二七〇)

卷三には黒人の歌が十三首も収められていて、特に羈旅歌八首(二七〇～二七七)が一括されている。その八首構成の第一番が二七〇の番歌である。この歌には問題になっている言葉と訓みがある。例えば第三句の「山下の」が地名である、いや枕詞であるとか、第五句の「沖に」が「沖へ」と訓むべきとかである。今後も種々の考察が可能なの

であろうが、この試論で考えたことは「赤のそほ舟」の意味である。「赤のそほ舟」の意味を確認して、叙景の内容を考えるのが、本論である。

「赤のそほ舟」という歌語について、五味智英氏に詳細な説明があつて、楮土で塗った赤い色の舟の意で、官船を意味し、さらに都通いの舟であるから、都恋しさを募らせるとしたのは、江戸時代の概落葉別記からとしている。<sup>(5)</sup>官船だから赤色に塗るのであろう、と想像することに批評があるにせよ、通説は官船とするべきであろう。<sup>(6)</sup>西宮一民氏も「朱船は官船と判断してよい」と述べているが、松田芳昭氏は二種類の「そほ舟」を指摘している。すなわち、松田氏は七夕伝説などを踏まえた「そほ舟」と現実に「そほに(辰砂)」とを採取する荷を運ぶ舟との二種類を考へる。<sup>(7)</sup>そこで「そほ舟」を含めて赤色の形容を伴う舟を、万葉集から採り上げてみる。七首が参考になるが、考察上により二つのグループに分類して示せば、次の如くである。

#### I 七夕伝説歌

(a) 牽牛は 織女と 天地の 別れし時ゆ いなうしろ  
川に向き立ち …… さ丹塗の こ舟もがも 玉纏の  
真櫓もかも (一は云はく、小棹もがも) 朝風に い  
掻き渡り 夕潮に (一は云はく、ゆふべにも) い漕

ぎ渡り ひさかたの 天の川原に 天飛ぶや 領巾片  
敷き（八・一五二〇）

(b) 天地の 初めの時ゆ 天の川 い向ひ居りて 一年に  
二度逢はぬ 妻恋に もの思ふ人 天の川 安の川原  
の あり通ふ 出の渡に そは舟の 艫にも舳にも  
船艫ひ 真楫繁貫き 旗簿 本業もそよに 秋風の  
吹き来る夕に（十・二〇八九）

(c) 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安けなくに さ、丹  
漆の、小舟もがも 玉纏の 小楫もがも 漕ぎ渡りつ  
つも 語らはましを（十三・三二九九）

## II 官船

(d) 牡牛の 三宅の潟に さし向ふ 鹿島の崎に さ、丹塗  
の、小舟も設け 玉纏の 小楫繁貫き 夕潮の 満ち  
のとどみに 御船子を 率ひ立てて 呼び立てて 御  
船出でなば（九・一七八〇）

(e) おし照る 難波の崎に 引き上る 赤のそは舟 そは  
舟に 網取り繫げ 引こづらひ ありなみすれど  
（十三・三三〇〇）

(f) 沖行くや赤ら小舟に裏遣らばけだし人見て披き見むか  
も（十六・三八六八）

(g) 赤のそは舟（二七〇）

赤い色の舟は、引用したa～gまでの七首で、「さ丹塗  
の小舟」（一五二〇、一七八〇、三二九九）、「そは舟」（二  
〇八九、三三〇〇）、「赤ら小舟」（三八六八）、「赤のそは  
舟」（二七〇、三三〇〇）という具合であり、さらに興味  
を引くのが「小舟」と「舟」とに分類できることである。  
すなわち、憶良歌（一五二〇）や虫麻呂歌（一七八〇）や  
憶良の伝誦歌（三二九九）、そしてやはり憶良の作と考え  
られる志賀白水郎歌（三八六八）は——「……小舟」とある。  
ちなみに虫麻呂歌（一七八〇）の引用した小舟を形容す  
る言葉は、山上憶良に学ぶとすべきであろう。それは、  
天平元年七月七日に作られている憶良の七夕歌（一五二  
〇）は、高橋虫麻呂の作品より先行すると考えられるから  
である。恐らく虫麻呂が藤原宇合を西海道節度使として見  
送って作った巻六・九七一と九七二番は天平四年であるか  
ら、「鹿島郡の刈野の橋にして大伴卿に別れた」歌も、憶  
良の七夕歌より新しいと考えるべきであろう。もう一つの  
理由は、憶良が虫麻呂の作品から影響されることにより、  
虫麻呂が憶良に学ぶことの可能性の高いことにもある。と  
にかくaとdとを比較するとき、「さ丹塗の 小舟……  
玉纏の ……楫……」と漢字仮名で示した共通部分からは、  
影響関係を認めざるを得ないのであって、憶良歌が古いも

のである。

虫麻呂歌dの題詞には、大伴卿（旅人か道足か不明）と別れるとき作ったとある。大伴卿が乗る舟を「さ丹塗の小舟」というのであるが、これ迄の注釈書に見られる赤い小舟を官船と解してよいのであろうか。憶良は天の川を渡る舟として「さ丹塗の小舟」を用いていて、虫麻呂がその七夕歌から影響された言葉を用いているのである。松田氏は七夕歌などの赤い舟のことを「靈異ある『そほ船』と呼称している<sup>(8)</sup>。

万葉集の相聞歌で渡河の意味は、男女が逢うことで、川を渡ることと恋の成就になる。但馬皇女は、生まれてはじめて「朝川渡る」（二・一・一六）とうたっている。これは、川をはじめて渡ったという経験的なものでなく、男女が相会うことを意味し、結婚まで考えているから「己が世にいまだ渡らぬ」というのである。とすれば、憶良がうたう赤い色の舟とは、むしろ不可能なことにもかかわらず渡河を可能にするとか、特別な意味を持つているとか、単純な色彩の説明にとどまらない内容があつてよい。ところで、「そほ船」も含めて赤い色の舟は、七首に登場していた。引用例では、長歌五首、短歌二首という割合である。短歌という世界でわざわざ舟の色までも表現して託する心情と

は、「棚無し小舟」と同様にそれなりのものがある筈である。長歌の世界で可能なこまやかな舟の表現領域である色彩を、短歌の世界で試みているが、それが黒人の創意なのであろう。「棚無し黒人舟」も「赤のそほ船」も、黒人によつて歌に取り入れられた言葉である以上、黒人の手柄であつた。その「赤のそほ船」が表面上の意味にとどまらない特別な意味があつても不思議ではない。

そこでIのグループづけ引用した七夕歌を参考にしたい。

aは憶良の作で、cもaの伝誦歌と考えられる。従つて、aとbを比較すればよいであらう。そのaもbも「天地の別れし時ゆ」や「天地の 初めの時ゆ」などであり、創世神話から牽牛と織女とは向かいあつて立つていたとする。またaには「天の川原」とあり、bには「天の川 安の川原」とあつて、共に高天の原にある処にあてはめた描写である。とすればaもbも、鳥の石楠船にせよ、天の石楠船にせよ、大空を自由に羽撃く鳥のイメージを持つ舟ということになる。七夕歌の赤い舟は、赤い鳥や太陽の鳥のイメージを持つものである。

IIのグループdからfを考えてみたい。まずdは虫麻呂歌でaの憶良歌の影響が認められていた。そもそもdの引用歌にある題詞にある大伴卿が乗る舟が「さ丹塗の小舟」

というのであるから、これ迄官船と考えているのは、憶良歌の影響を加味したときに疑問のある解釈である。すなわち、虫麻呂がわざわざ七夕歌に用いられた歌語を用いるのであるから、それはそれなりの理由がある。反歌に、

海つ路の和ぎなむ時も渡らなむかく立つ波に船出すべしや（一七八一）

とあって、船出を引きとめたい程の波の高さがあつた。

土佐日記正月七日の条に、

ゆくさきに立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれや  
まさらむ

とある歌に対して、かなり皮肉まじりに舟君が批評するのは「ゆくさきに立つ白波」を言忌みすることによる。貫之には歌主が非常識だったのである。その意味では虫麻呂も批評されるのであろうが、かかる状態の海に舟出するのであるから、「さ丹塗の小舟」を揃えなければならないのである。

dの長歌は「牡牛」「三宅」「鹿島」と三つ地名が連続して、儀礼歌らしい道行形式を踏まえて格調高くうたい出している。そして大伴卿の乗り込む船は、七夕歌には使用されているところの如何なる困難も乗り越えるものである。とすれば、dの「さ丹塗の小舟」とは、官船などという意

味で理解するのではなく、まさしく大空を飛翔する鳥の如き舟である。

次にeとfの引用例であるが、eにせよfにせよ、不思議な能力のある舟として理解すべきである。eは、噂を否定するための譬喩に赤い舟を引くというのであって、ひよつとして可能かも知れないという前提がある。現実に存在するのではなく、仮定条件で用いられていることは、志賀白水郎歌の引用例であるfにも適合する。fに「沖行くや赤ら小舟に裏遣らば」とあって、不可能なことを願うことを前提にしてうたわれる。荒雄に土産をやるかも知れないという前提は、「赤ら小舟」だから生れるのである。赤い舟が官船だからではなく、それは遭難した海に行くことを可能にする舟だからであらう。とすれば沖に行くことを可能にする舟とは、虫麻呂歌dの用例と同様な性格になる。現実には存在する舟などを考える必要はないのであって、ひよつとして、もしかしたらという願望を含みもたされた「神の舟」とでも呼称すべき舟が赤い色彩の舟だったのである。赤い色の舟の用例としたaからfまでは、現実に存在するのではなく、想像上の舟である。もちろん人間社会に存在するものの裏付けがあることは自明である。しかし、それは「神の舟」なのである。

さて、黒人か沖に行く舟を「赤のそほ舟」とうたうとき、その光景が眼前に展開するもので、赤い舟が官船などと理解してよいのであろうか。黒人は直接家をうたわれないが、歌の内容から「物恋しき」という対象が故郷なのであるから、二七〇番で「赤のそほ舟」を対象にしていることになる。赤い舟が故郷を感じさせるのであって、それは「神の舟」と考えれば充分説明出来ることになる。天地開闢神話に始まる「赤の舟」とは、ひょっとして、もしかしたらという願いを込めて用いられている。

黒人は大海に浮かぶ「赤のそほ舟」を見つめている。事実として赤い舟が存在しているのではない。舟は天空をも運化する「神の舟」である。二七〇番歌は、青や赤や緑、そして白という見事なまでの色彩で染まっている。心情語と景との調和なども旅愁のテーマを強調することになっていて、黒人歌の特質が見られる。しかし、二七〇番の景は、黒人の夢見たものであり、決して事実としての叙景でなかったことになる。

## 結び

高市黒人は、優れた叙景歌を残している。全作品がごとく旅に素材した短歌ばかりであるが、長歌を作らな

かったのは、主に文武朝に行幸従駕して歌を献上したためである。黒人と同様な宮廷歌人なども文武朝では、行幸の場で晴れがましい長歌を作っていなかった。

旅の生活は、従来の日常と異質な感情に至る。旅愁というものであるが、とりわけ去っていくものに強く心が引かれている。その過ぎ行くものでも、舟が一番多くうたわれた。直接に舟をうたう歌が五首、船に何らか関わる二首を加えたとき、歌の数は七首にもなる。その歌の中から、特徴ある形容が用いられていた「棚無し小舟」と「赤のそほ舟」を考察した。

黒人は、去っていく小舟をさらに「棚無し小舟」と描写して、独自の旅愁をものした。自己の動揺する心情は、この点景によって個性に高められたのである。しかも「棚無し小舟」とは、黒人の創始に思える歌語である。すなわち、「何処にか」（五八）「四極山」（二七二）の二首は、黒人の心情を独自の言葉で表現した。一方「旅にして」（二七〇）は、「赤のそほ舟」に「神の舟」と呼称される内容がある。万葉集では、赤い色の舟が天の川を渡れるとか、特別な能力を持っているとか、とにかく官船などというものでない。「旅にして」でうたわれた「赤のそほ舟」とは、彼の心の故郷であり、夢見た舟なのである。

これまで縷々述べてきたことは、黒人の叙景歌の素材に舟が一番多いこと、そして「棚無し小舟」や「赤のそぼ舟」に注目したとき、黒人を舟の歌人と呼称する特質があったことである。黒人は舟の歌人であった。

(注)

- 1 『万葉の詩と詩人』 高市黒人 一四六頁。
- 2 「高市黒人羈旅歌」(『万葉集を学ぶ第三集』所収)。
- 3 注1同書 一五六頁。
- 4 「万葉語『舟』と『大舟』」(『文芸研究』一〇九号)。
- 5 『増補古代和歌』 高市黒人 九五―九六頁。
- 6 『万葉集全注卷三』 九二頁。
- 7 「万葉集における『そほ船』の変容」(『就実語文』六号)。
- 8 注7に同じ。

(本学助教授)